

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：15101

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13881

研究課題名(和文) 多文化社会の破局的状況と排除・差別の複合経験に関する調査研究 阪神から他地域へ

研究課題名(英文) Research on the Catastrophic Situation of Multicultural Society and the Experiences of Multiple Exclusion and Discrimination - From Hanshin to Other Regions

研究代表者

稲津 秀樹 (INAZU, HIDEKI)

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：10707516

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果として、阪神・淡路大震災に限らない災禍の経験(コロナ禍、水災、戦災等)といった複数の出来事を同時に包含する観点を組み込んだ、社会学の理論と方法を、人類学や地理学といった近接領域との対話を通じて示してきたことが挙げられる。日常生活世界における「軌跡の渦巻く場所からの想像力」を捉え、これを記述することで、これまでの移民/災害研究の前提だった、単一のアクター(例：在日コリアン)、あるいは地域(例：神戸)の出来事に限定したアプローチではなく、複数のアクター、複数の地域を想像的に結び付けながら、複合差別・排除の経験を論じる社会把握・記述を可能にしたことが、本研究の最大の成果として挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、第1に、多文化社会化の進む地域社会の破局的状況と排除・差別の複合経験はどのような経験であるか、第2に、この経験を踏まえた多文化共生論の再構想はいかにして可能となるかという課題を掲げて遂行された。計画当初は、阪神・淡路大震災との関わりを念頭に置いていたが、コロナ禍に見舞われ、調査内容の変更や遅れを余儀なくされた。だが、研究期間の実績を振り返ると、上の問いを探究する理論的・方法論的な知的貢献のみならず、港湾都市・神戸を軸におきながらも複数のアクター・複数の地域に開かれた歴史的空間的な視座をもつ批判的モノグラフを提出できたことには大きな学術面・社会的な意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：As a result of this research, we would approach sociological theory and methods that incorporate a perspective that simultaneously encompasses multiple events, such as the experience of disasters not limited to the Great Hanshin-Awaji Earthquake (Covid-19 disaster, water disasters, war damage, etc.), through dialoging with anthropologists and geographers. Capturing and describing "imagination from a place where trajectories swirl" in the world of everyday life, as a result, instead of a previous approach that is limited to a single group (e.g. Korean residents in Japan) or a single region (e.g. Kobe), which has been the premise of migration/disaster research up until now, It has made it possible to understand and describe society by imaginatively linking the two, while discussing the experiences of multiple discrimination and exclusion. to This is the greatest achievement of this research.

研究分野：社会学

キーワード：多文化社会 破局的状況 排除・差別 複合経験 カタストロフィ 阪神・淡路大震災 軌跡の渦巻く場所からの想像力

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景として、カタストロフィをめぐる経験と、排除・差別をめぐる経験を分節化して理解する、既存の問題認識の枠組みが挙げられる。破局的状況を指すカタストロフィをめぐる経験は、近年は特に、東日本大震災の後、人文・社会科学分野での真摯な議論が重ねられてきた。「戦争社会学」や「災害社会学」の議論も日本社会学会内外で続いており、そこでは戦争・紛争経験や災害経験に着目することで、これまで社会科学の対象外とされてきた出来事への理解可能性が探究されてきた。他方、排除・差別の経験についても、複雑化する現代社会の歪みを現場目線で捉えるフィールドワークに基づく調査研究が重ねられてきた。特にグローバル化の影響の下、国境を越える移民・エスニシティから構成される多文化社会における排除・差別の経験に関する議論も、学会内外で活況を呈している。しかし、これらの調査研究の統合を目指す議論については、私見では未だ活発に行われていないように思われる。

よって、本研究では、この内実を多文化社会化が進むローカルな地域社会における、カタストロフィと排除・差別の複合経験として統合的に捉えなおしていく。多文化社会化が進む地域社会におけるカタストロフィと排除・差別の複合経験とは、どのようなものであるか。さらに、この経験を踏まえた上での多文化共生論の再構想はいかにして可能となるのか。これらの問いを、研究代表者が対象とする阪神地域の破局的状況（特に、阪神・淡路大震災）以外の地域経験にも広げながら考えていく。以上が、研究開始当初の問題の背景である。

2. 研究の目的

上記の背景と「問い」に基づく本研究は、社会学の質的研究の方法に則りながら、災害に留まらない戦争、ひいては諸外国にルーツを持つ文化性・民族性を有するが故の排除・差別の体験をめぐる調査を行うことで、通常、別々の経験として理解されがちな、これらの複合経験を統合的に把握する視座を提供することを目的とする。そのために、次の3点の課題に取り組むことが本研究の具体的な目標となる。

- a) 多文化社会のカタストロフィと排除・差別の複合経験に関する質的調査
- b) 自然変動と社会変動を踏まえた複合差別論・多文化共生論の理論的転回
- c) 研究基盤と地域ネットワークづくりの準備 在日コリアンの経験を中心に

3. 研究の方法

上述した目標ごとに記述する。

a) 多文化社会のカタストロフィと排除・差別の複合経験に関する質的調査

多文化化・多民族化を促す条件となる港湾都市の1つ、神戸をメインフィールドとしながら、縦軸に水災（阪神大水害）/戦災（神戸空襲）/震災（阪神・淡路大震災）に代表されるカタストロフィ的な都市史を置きつつ、横軸に移民・エスニックグループ等に限らないマイノリティの排除・差別の複合経験を、参与観察/聞き取り/映像・資料分析などの複合的な質的調査方法を用いながら、調査モノグラフとして発表していく。また他地域へのフィールドワークも随時行うことで、比較の視座をもって調査を展開していく。

b) 自然変動と社会変動を踏まえた複合差別論・多文化共生論の理論的転回

a)の経験的調査を踏まえながら、自然変動と社会変動を組み込んだ複合差別論・多文化共生論の理論的再検討を、カタストロフィと排除・差別をめぐる移民・難民の経験、ひいては多文化主義理論を扱った社会人類学者・Ghassan Hage氏（メルボルン大学教授）の著作を、共訳にて明石出版から翻訳出版し、国際シンポジウムを開催していく中で、英語圏での議論動向との接続と対話を行いながら考えていく。

c) 研究基盤と地域ネットワークづくりの準備 在日コリアンの経験を中心に

a), b)の調査研究成果の具体化を、大学外の研究基盤と地域ネットワークづくりを兼ねて行っていく。前者は阪神地域の在日コリアンのカタストロフィと排除・差別の複合経験について得られた資料を中心に、神戸市内の調査先団体が設立予定の在日コリアンのアーカイブプロジェクトに参与する形でフィードバックする。後者は調査報告書の作成と、ワークショップを開催することで行っていく。以上により、今後の比較調査に向けた本格的な研究基盤形成の準備を行うのみならず、研究成果の社会還元を通じた、多文化社会形成の一助となることが目指される。

4. 研究成果

以上の背景、目的、方法をもとに、2019年度から2023年度まで研究を遂行した。その成果としては、既に提出・公表済の報告文がある場合は、転載ないし、公表済の記述を踏まえながら、下記に報告する。

(1)2019年度

研究目的に関連する3冊の共著刊行と1回の国際学会報告を行うことができた。共著については、家中茂ほか編『[新版]地域政策入門 地域創造の時代に』(ミネルヴァ書房)には、「多文化・多民族社会の想像力」「マイノリティと法制度」「復興が生み出す社会問題」を寄稿した。他にも、ケイン樹里安ほか編『ふれる社会学』(北樹出版)では、『魂』にふれる」を寄稿した。野田邦弘ほか編『アートがひらく地域のこれから クリエイティビティを生かす社会へ』には(ミネルヴァ書房)「創造の実験場としての被災地 『ポスト震災20年』の神戸における開発主義の変容」を寄稿した。これらから、現代社会における人間の「魂」の水準を問題化すると同時に、それが「多民族・多文化社会」化する状況において、どのような変容を経験しているのかを問いかけた。その上で、マジョリティとマイノリティという関係性をつくりだす権力と法制度(政策)によって、差別・排除が生じていく際の基本論理について考察した。これらの具体的な現れの一例として、阪神・淡路大震災の後の神戸を中心的な事例地とした「市民」の創造性を対象としながら、これが「復興」や「開発」をめぐる官僚的創造性とどのような関わり方をしているのかを経験的に検証した。また、2019年7月に慶応義塾大学で開催されたカルチュラル・スタディーズ学会における「Dialogue with Ghassan Hage: On Alter-Politics: Critical Anthropology and The Radical Imagination」に出席した際のコメントと議論を通じて、今後の研究の方向性についても、有益な示唆を得ることができた。他にも、研究内容を踏まえた教育実践報告を所属学部紀要に2本投稿し、市民・住民向けのアウトリーチ講演も1回行った

(2)2020年度

新型コロナウイルスの流行とその社会的影響を、本課題の文脈に沿って考察することが中心となった。そのため、当初の研究計画にはない小論の発表とアウトリーチの機会を設けることとなったが、これは新型コロナウイルスの流行とそれに伴う差別・排除の動きそのものが、本研究課題が問題化する内容とも合致するためであった。前者については「新型コロナウイルスと身近な差別感情 - 『息ができない』時代の苦しさに抗するために」として、鳥取人権情報センターの機関誌『架橋』に投稿した。後者については、2019年度に刊行した共著『ふれる社会学』(北樹出版)に関連した市民向けのオンライン講座(「ふれない社会にふれる」)として、多文化社会の破局的状況と排除・差別の複合状況を問題化し、参加者に提示した。他にも、本研究の現場の一つとなっている夜間中学に関連した行政の研修会や、「歩く」という社会的行為をテーマとしたアーティストのインスタレーションにて、多文化社会の現況や、他者理解の方法論としてのフィールドワークについて、市民とともに考える場を設けた。これらに加えて、昨年度に鳥取大学地域学部にて開催したシンポジウム「地域学研究大会第10回大会報告：地域課題と知のクロス - 『地域をえがく - 想像力としての地域学』」の共著原稿を公開することを通じて、研究課題の遂行者がテーマとしてきた、『社会的分断を越境する』ための想像力を考える上での重要な示唆を得た。新型コロナウイルスの諸影響により、研究計画の修正を余儀なくされ、出版予定など必ずしも計画通りにはならなかったことが至らなかった点である。しかし、カタストロフィックな(破局的な)出来事の只中で、変化するフィールドからのレポートを継続的に重ねられたことが、当年度の何よりの研究実績だったと考える。

(3)2021年度

今年度の研究は、昨年度に新型コロナウイルスの流行を受けて、急遽変更された研究計画を、再度修正しなおし、本研究課題の追加リサーチとアウトプットに向けた準備を進めることが中心となった。その途上の研究成果として、これまでに刊行した2冊の共著(内1冊は共編著)を電子書籍として再発表するとともに、市民講座を通じたアウトリーチと新聞記事投稿を1件ずつ行い、オンライン学術シンポジウムに2回登壇した。電子書籍として再発表した書籍は次の通り。『多元主義を理解するための30冊 多様化する世界を読み解き、生き抜くために』(BA コンソーシアム・暮沢剛巳・清水知子編)、『社会的分断を越境する 他者と出会いなおす想像力』(塩原良和・稲津秀樹編)。これらの成果を総括しながら、コロナ禍も含めた多文化社会の破局的状況における社会的分断のメカニズムと、これを生き抜くための越境する想像力の重要性を、市民講座(鳥取大学サイエンスアカデミー)と新聞記事投稿(日本海新聞)を通じて発表した。さらにオンライン学術シンポジウムの中では、この想像力の根源的批判性とその条件を再考する機会を得た。日本大学文理学部主催のシンポジウムに登壇した際には、エスノメソドロジー派に発する経験的社会学の仕事を確認しながら、「調査するわたし」も含めて存立している「日常性」を条件として、差別・排除への批判的想像力が喚起されることを議論した。次に、鳥取大学地域学部主催の地域学研究大会に登壇した際には、「当事者研究」のアプローチを参照しながら、差別・排除への応答責任を果たしていく当事者の想像力のあり方について議論した。反省点としては、昨年度同様、研究計画の修正を余儀なくされ、出版予定が必ずしも計画通りにはならなかった点であるが、以上の議論を、準備中の書籍内容に積極的に盛り込むことが期待される。

(4)2022 年度

年度途中から休暇を取得した関係もあり、実質半年間ほどの成果が中心となる。限られた時間ということもあり、この期間は、本研究課題に即した追加リサーチとアウトプットを進めることが中心となった。追加リサーチでいえば、コロナ禍の影響が変化し、調査課題の現場である、神戸をはじめとする関西圏のフィールドに赴き、参与観察のみならず、直接の聞き取りが本格的に再開できたことは、本研究において大きな進捗となった。アウトプットでいえば、本研究の理論的支柱となる多文化社会の批判的想像力に関する翻訳書（共訳）の刊行がなされ、これに関連したオンライン国際シンポジウムの開催、および、研究代表者自身も登壇・報告したことが挙げられる。また、昨年行ったシンポジウムの内容が一部論文として発表されるなど、研究課題に関連した他のアウトプットができたことも当年度の成果である。具体的な実績としては、次の通りである。

『オルター・ポリティクスー批判的人類学とラディカルな想像力』（ガッサン・ハージ著、塩原良和・川端浩平・前川真裕子・稲津秀樹・高橋進之介訳、明石書店、2022）。

「地域学研究大会第11回大会報告：地域課題と知のクロス - 『地域の当事者とは誰か - 当事者研究と地域学』、『地域学論集』19(1)1-50（向谷地生良・山根耕平・笹淵乃梨・植田俊幸・田中大介・稲津秀樹・菰田レエ也・呉永鎬・西浦勝之・丸祐一、鳥取大学地域学部、2022）。

'Searching for Alter-Politics in the Stuckedness of Multiculturalism :A Commentary Letter to Ghassan Hage' 『他者性の否認に抗する共生の思考 - ガッサン・ハージ氏特別講演』（慶應義塾大学・明石書店共催・招待講演、2022）。

(5)2023 年度

研究目的に関連する1篇の論文を含めた1冊の共編著（報告書）刊行と、国際学会レベルの報告を1件行った。また、昨年度に出席したオンライン講演会の抄録をWEB上にて発表することができた。具体的には、本岡拓哉・野上恵美・中西雄二・稲津秀樹編『まちかどの記憶とその記録のために 神戸長田からノヘ vol.3』（科研費報告書、2024年3月刊行、B5版 全254頁）には、論考「湊川ジャンクション 軌跡の渦巻く場所からの想像力」（同p.28-103）を寄稿した。他にも、'Walking, Listening, and Imaging at the Transnational Edge: Multicultural Trajectories around Kobe, Before/After Great Hanshin-Awaji Earthquake' と題した講演を、ニュージーランドヴィクトリア大学ウエリントン校にて開催されたTransnational Asia:Japan and the Asia-Pacific in the New Millenium 内にて行った。WEBサイトは、「他者性の否認に抗する共生の思考」（<https://webmedia.akashi.co.jp/posts/7060>）として、明石書店（出版社）のサイトに掲載済みである。最後に、上記の調査課題c）として記した、神戸市内の在日コリアンを中心とする資料アーカイブへの協力を通じた地域の研究基盤・ネットワークづくりに関しても、具体的にミュージアム開設に向けた動きが本格化し、研究成果のアウトリーチも随時行う環境が整うに至った。

研究計画を構想した当初の想定としては、対象となるカタストロフィの経験として、阪神・淡路大震災に表される巨大災害を念頭に置いていた。しかし、研究遂行の過程で新型コロナウイルスの世界的流行という事態に見舞われたために、海外調査先の模索も含めた当初の調査内容の大きな予定変更を余儀なくされ、既存のフィールドワーク先だった阪神地域を中心にテーマを掘り下げる形となった。しかし改めて、この研究期間の全ての実績を振り返ると、結果として上記の問いを探究するための、理論・方法論上の知的貢献のみならず、港湾都市・神戸を軸において歴史的空間的視座をもった調査モノグラフを複数提出できたことは、本研究の成果といえる。

社会学分野における理論的貢献としては、近年の「当事者研究」の潮流も踏まえた社会的/人類学的想像力に関する理論に関わる著作・発表を行ったことが挙げられる。人間の「魂」の水準から既存の社会問題（差別・排除）と社会構想のあり方を捉え返し、批判的に思考するための視座を著してきた。方法論的貢献としては、「日常性」のフィールドワーク論の系譜を踏まえながら、視る/聞く/歩く/想像するという人間の行為を具体的に据えて、既存の「まちあるき」の軌跡を反省的に捉え直すという、認識と身体との関わりを強調して著してきた。

これらの理論と方法（現場認識）に基づきながら、複数の人の複合経験を歴史的空間的に扱うための視座を、上述の報告書論文において「軌跡の渦巻く場所からの想像力」として提示した。よって、本研究期間中に著された経験的モノグラフは、カタストロフィの経験として、阪神・淡路大震災に限らない災害（コロナ禍、水害等）また戦争体験といった複数の出来事を同時に包含する観点が、排除・差別の経験としても単一のアクター（例：在日コリアン）に限らない、複数のアクターの経験を含み込む複数視座を同居させることを可能とした。破局的状況と複合差別・排除にさらされる多文化社会を考える際の社会的想像力の在り方の1つを提示したことが本研究の最大の成果である。これを踏まえた第2の問い、多文化共生論の理論的転回をめぐる課題については、出版企画までは結びつき、実際の出版に向けた研究会が立ち上がったものの、科研の完成年度内に刊行するまでには至れなかった。他地域、海外調査との比較検証とあわせて、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 向谷地生良・山根耕平・笹渕乃梨・植田俊幸・田中大介・稲津秀樹・菰田レエ也・呉永鎬・西浦勝之・丸祐一	4. 巻 19(1)
2. 論文標題 「地域学研究大会第11回大会報告：地域課題と知のクロス - 『地域の当事者とは誰か - 当事者研究と地域学』」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 1-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 稲津 秀樹	4. 巻 43
2. 論文標題 新型コロナウイルスと身近な差別感情 - 「息ができない」時代の苦しさに抗するために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 架橋	6. 最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 柴崎友香・蛇谷りえ・福田修三・佐藤紘一・佐々木孝文・村田周祐・稲津秀樹	4. 巻 17(1)
2. 論文標題 地域学研究大会第10回大会報告：地域課題と知のクロス - 「地域をえがく - 想像力としての地域学」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 1-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村田周祐・稲津秀樹	4. 巻 16(2)
2. 論文標題 いま・ここで創られる地域学—2019年度鳥取大学地域学部『地域学総説』の現場から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柳静我・柳原邦光・岸本覚・久保堅一・稲津秀樹・小林幸基・垣屋知里	4. 巻 16(3)
2. 論文標題 東アジアプロジェクトの成果と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 77-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 稲津秀樹	4. 巻 3
2. 論文標題 湊川ジャンクションー軌跡の渦巻く場所からの想像力	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 まちかどの記憶とその記録のために 神戸長田から／へ	6. 最初と最後の頁 28-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲津秀樹・岡村知子・白石秀壽・石山雄貴	4. 巻 20-3
2. 論文標題 いま・ここで創られる地域学 - 2023年度鳥取大学地域学部地域学総説の現場から 3	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 9-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 6件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Hideki Inazu
2. 発表標題 Searching for Alter-Politics in the Stuckedness of Multiculturalism :A Commentary Letter to Ghassan Hage
3. 学会等名 『他者性の否認に抗する共生の思考』（慶應義塾大学・明石書店共催）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 稲津秀樹
2. 発表標題 応える 地域の当事者とは誰か(パネル討論提題)
3. 学会等名 鳥取大学地域学部第11回地域学研究大会(パネルディスカッション)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 稲津秀樹
2. 発表標題 地域フィールドワークと応答の課題 社会的分断を視る/聞く/歩く
3. 学会等名 鳥取大学地域学部第11回地域学研究大会(パネルディスカッション)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三谷昇・呉永鎬・稲津秀樹
2. 発表標題 外国人児童生徒等の統計情報をめぐる地域課題の実証的把握(1) 山陰地方を中心に
3. 学会等名 鳥取大学地域学部第11回地域学研究大会(ポスターセッション報告)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 好井裕明・桜井厚・山田富秋・稲津秀樹・吉村さやか
2. 発表標題 日常性を再考する
3. 学会等名 学術シンポジウム 日常性を再考する(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ケイン樹里安・上原健太郎・栢木清吾・稲津秀樹・有國明弘
2. 発表標題 ふれない社会にふれる
3. 学会等名 『ふれる社会学』トークイベント「『ふれない社会』にふれる」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 稲津秀樹
2. 発表標題 「こんばんは2」の世界にふれる
3. 学会等名 鳥取県西部地区社会教育関係者研修会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 稲津秀樹
2. 発表標題 歩くことの創造性
3. 学会等名 歩録:Exhibition/Performance 歩くこととその記録からなる展示と上演（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 INAZU,Hideki
2. 発表標題 Commentary on "Alter Politics: Critical Anthropology and the Radical Imagination"
3. 学会等名 Cultural Typhoon 2019(カルチュラル・スタディーズ学会)（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hideki Inazu
2. 発表標題 'Walking, Listening, and Imaging at the Transnational Edge: Multicultural Trajectories around Kobe, Before/After Great Hanshin-Awaji Earthquake'
3. 学会等名 Transnational Asia:Japan and the Asia-Pacific in the New Millenium / Victoria University of Wellington School of Languages and Cultures (招待講演) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 ガッサン・ハージ (塩原良和・川端浩平・前川真裕子・稲津秀樹・高橋進之介訳)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 425
3. 書名 『オルター・ポリティクスー批判的人類学とラディカルな想像力』	

1. 著者名 暮沢剛巳・清水知子・安達智史・稲津秀樹・小笠原博毅・菊地暁・熊倉和歌子・駒居幸・小山裕・佐藤嘉幸・塩原良和・鈴木弥香子・多賀健太郎・中井亜佐子・西亮太・長谷川啓介・水嶋一憲・毛利嘉孝	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Amazon Services International, Inc.	5. 総ページ数 250
3. 書名 [新版]「多元主義」を理解するための30冊 多様化する世界を読み解き、生き抜くために	

1. 著者名 家中茂・藤井正・小野達也・山下博樹編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 『新版 地域政策入門ー地域創造の時代に』	

1. 著者名 ケイン樹里安・上原健太郎編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 『ふれる社会学』	

1. 著者名 野田邦弘・小泉元宏・竹内潔・家中茂編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 292
3. 書名 『アートがひらく地域のこれからークリエイティビティを生かす社会へ』	

1. 著者名 共在の場を考える研究会（本岡拓哉・野上恵美・中西雄二・稲津秀樹）編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 野村印刷株式会社（印刷）	5. 総ページ数 254
3. 書名 まちかどの記憶とその記録のために 神戸長田から / へ vol.3	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------